

10月26日（月）ヘブル人への手紙7章15～17節

「その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらず、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。」（16節）

レビ族の祭司たちは、肉についての戒めの律法により立てられました。「肉についての戒めである律法」とは、血統によって祭司を定めることを指していて、例えばレビの家系に生まれれば、それだけで祭司になることができるということを意味しています。それと同時に、「肉についての戒め」に関して重要なことは、そこには肉の弱さが含まれているということです。それは、死によっていつまでも祭司の務めにとどまることができないとか、（23節）民の罪のためだけではなく、自分の罪のためにもいけにえを献げなければならない（27節）ということです。しかし、メルキゼデクと同じような祭司であるイエス様は、「朽ちることのない、いのちの力によって祭司とされました。イエス様は、ご自分のためではなく、全人類の罪の完全な罪の贖いを成し遂げるために、十字架にかかって死なれましたが、三日目に死からよみがえられました。これこそが「朽ちることのない、いのちの力」です。これにより、イエス様は、肉についての戒めの律法によるレビ族の祭司のようにではなく、永遠の大祭司とされました。

そして17節では再び詩篇110篇4節が引用され、「この方について、こう証しされています」とあって、イエス様がメルキゼデクの例に倣って、とこしえの大祭司とされたのは、みことばに基づく神のみこころであることが明らかにされているのです。

新約の時代を生きる私たちには、肉についての戒めの律法により立てられた祭司ではなく、死からよみがえられた、とこしえの大祭司であるイエス様がおられて、この方が私たちのためにいつもとりなしをしてくださることを心から感謝いたしましょう。

10月27日（火）ヘブル人への手紙7章18、19節

「もう一方では、もっとすぐれた希望が導き入れられました。これによって私たちは神に近づくのです。」（19節）

19節に「もっとすぐれた希望が導き入れられました。」とあります。どのようにしてかと言いますと、「メルキゼデクに等しい、別の祭司が立てられる」（17節）ことによってです。13節に「私たちがこれまで語って来た方は、祭壇に仕える者が出たことのない、別の部族に属しておられます。」とあり、その別の部族というのはユダ族のことです。そのようにして本来祭司はレビ族から出ると決められていたのに、別の部族から別の祭司が出たというのは、何を意味しているのでしょうか。一つが、18節にあるように前の戒め、古い律法の廃止ということです。律法によっては、完全に到達できないことで「律法は何事も全うしなかった」（19節）こ

とが明らかになったので古い律法に変わる新しいものが必要となったということです。もう一つが、人によるのではなく、神によってさらにすぐれた希望が導き入れられるということが明らかになるためです。そして、人によらないで神によって立てられたメルキゼデクに等しい祭司は、「朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。」（16節）つまり、死ぬことのない永遠に生きておられる祭司ということです。ですから、私たちはこの方が永遠に私たちのために祭司の務めを果たしてくださることを信じることで、「さらにすぐれた希望が導き入れられ」、さらにすぐれた祭司によって私たちは「神に近づくことができるのです。」

私たちは、いつも神に近づき祈りをささげ、礼拝をささげています。しかし、それはイエス様が私たちの祭司となってくくださるからであり、イエス様が私たちのさらにすぐれた希望となってくくださるからです。そのことを私たちは知り、いつも感謝できているのでしょうか。

10月28日（水）ヘブル人への手紙7章18，19節

「もう一方では、もっとすぐれた希望が導き入れられました。これによって私たちは神に近づくのです。」（19節）

ここで15節にあります「メルキゼデクと同じような、別の祭司が立てられた」理由を説明します。16節の「肉についての戒めである律法」を、18節では「前の戒め」と言い換えられていて、時間的に先にあった戒めという意味だけでなく、イエス様による新しい律法のための備えの意味もあります。まず前の戒めは弱いということがあります。これは、律法を守る人にいのちを与えることがなかったということです。むしろ、律法は人に守るべき基準を与え、人に自らの罪深さを指し示すことしかできませんでした。次に「無益なため」とありますが、これは律法が無価値ということではありません。むしろ、聖なる生ける神に絶えず近づく手段を提供するには無益だということです。その弱さと無益さのゆえに前の戒めは廃止されました。「律法は何も全うしなかったのです」とは、律法が完全に無効とされたとか、全く意味のないものとされたということではなく、全うする手段としては考慮されないということであり、それは、すなわち律法はイエス様によって全うされたことをも意味しています。

「もう一方では、もっとすぐれた希望が導き入れられました」とあり、ここでもっとすぐれた希望が語られます。前の戒めにおいても希望がなかったわけではありませんが、もっとすぐれた希望と言われています。そして、ここで言われている希望とは、神に近づくということです。旧約の時代のイスラエルの民にとって最大の希望は神に近づくということであり、人々は神に近づくためにありとあらゆることをしました。しかし、イエス様が十字架で完全な罪の贖いを成し遂げ、三日目に死からよみがえられ、とこしえの大祭司となられたことで、神に近づくという希望が完全に成就され、私たちは恐れず、常に、また自由に、生けるまことの神に近づく

くことができるようにされています。このことを私たちも心から感謝いたしましょう。

10月29日（木）ヘブル人への手紙7章20～22節

「その分、イエスは、もっとすぐれた契約の保証となられたのです。」（22節）

ここにもメルキゼデクの位に等しい祭司であるキリストが、レビ族の祭司よりすぐれていて、完全である理由が記されています。

普通レビ族の人々が祭司となるにあたっては、世襲ですから特別な誓いは必要ありませんでしたが、キリストが祭司となるにあたってはキリストに対する誓いがありました。（21節）神は「主は誓われた。思い直されることはない。『あなたはとこしえに祭司である。』」と言われましたが、その誓いとは、将来的にとこしえの祭司が立てられることに対する誓いであり、約束でした。そして、その通りにとこしえの祭司であるイエス様が与えられることにより、旧約時代の神の誓いが、キリストを通して成就したのです。このことにより神様の真実と、神は必ず約束を成就される方であることが証明されました。ですから「イエスは、もっとすぐれた契約の保証となられたのです。」（22節）19節で「律法は何も全うしなかったのです。」とありますが、イエス様は律法にまされる、もっとすぐれた契約の保証となってくださったということであり、それはまさにこのイエスを通して神に近づくことのできる保証です。

イエスがとこしえの祭司となってくださって、私たちがキリストに近づく道が与えられていることに心から感謝いたしましょう。そして私たちにはとこしえの大祭司であるキリストにより与えられている約束があり、私たちに与えられている希望があります。それらに対してイエスは「さらにすぐれた契約の保証」となられたのです。ですから私たちは、私たちに誓われた通りにイエスを与えてくださった神様に感謝するとともに、イエスを通して与えられる信仰と希望に対する確信が増し加えられるように願われます。

10月30日（金）ヘブル人への手紙7章23～25節

「したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります。」（25節）

人が祭司となった場合には、「死ということがあるため、務めにいつまでもとどまることができず」（23節）というところに、不完全さがあります。しかしメルキゼデクの位に等しい祭司であるイエス様は「永遠に存在されるので、変わることがない祭司職を持っておられます。」（24節）ここに祭司としてのイエス様の優越性があります。

ここまで、イエス様はメルキゼデクの位に等しい祭司であり、どれほど他のレビ族出身の祭

司より優れているかということが述べられてきました。まず私たちは、このイエス様のゆえに神様に近づくことができるということです。しかも完全に罪が赦され、贖われた者として、恐れなく、大胆に神様に近づくことができるということです。そして「ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。」とされています。ここで言われている救いというのは、罪からの救いはもちろんですが、罪の力や支配からの解放をも意味しています。地上における歩みの中で私たちは罪を犯すことがありますが、すでに私たちは、イエス・キリストを信じる信仰により完全な救いを経験しているのです。さらには「完全な救い」ということで、そこには制限が何もありません。例えば、いつの時代の人であっても、どこの国の人であっても、病気の人でも、健康な人でも、貧しい人も豊かな人も、子どもも年配者も誰でも完全な救いを経験することができることを意味しています。

そして、神に近づくことと完全な救いを経験することができるのは、「イエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので」とあるように、永遠に存在されるイエス様が私たちへの愛とあわれみのゆえに、とりなしをしてくださっているからです。このイエス様に心からの感謝をささげ、イエス様のゆえに神に常に大胆に近づき、完全な救いを目指して日々歩ませていただきたいと願わされます。

10月31日（土）ヘブル人への手紙7章26節

「このような方、敬虔で、悪も汚れもなく、罪人から離され、また天よりも高く上げられた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。」

この節においてイエスの大祭司としての特筆すべき姿を見ることができます。まずイエスは「敬虔で、悪も汚れもなく」とされています。敬虔とは、過誤や汚れた行動により非難されることがないということであり、悪がないとは一切罪がないということ、そして汚れがないとは道徳的な腐敗が一切ないということを意味しています。これはイエスが確かにまことの神がまことの人となられたことを意味しています。ですから「罪人から離れ」とされています。このことについて、まず一つが罪のないイエス様の性質は、他の罪人と完全に分離させます。それと同時に、イエス様は完全で永遠の大祭司となりました。レビ族から出た大祭司は、自分の罪をきよめることを通して至聖所に入ることが許されましたが、敬虔で、悪も汚れもなく、罪人から離された大祭司イエスは、自由に父なる神と愛の交わりを持ち、それとともにご自身を通して神に近づく人を完全に救ってくださるのです。そして「天よりも高く上げられた」とは、1章3節の「いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」を思い出させます。そのようにして大祭司イエス様は栄光をお受けになられたのであり、この方に並ぶ者は他になく、まさに比類なき大祭司であるということです。

大祭司としての働きにおいてイエスにまさる者は誰もいませんし、誰一人としてイエスに代わってその働きのできる人はいません。ですから、私たちが、本当の意味で大祭司としてのイエスがどのような方かを知るならば、私たちにとってイエスは、まさに必要な方だと言わざるを得ないのです。このような大祭司イエス様を与えてくださった父なる神に心からの感謝をさげましょう。

11月1日(日) ヘブル人への手紙7章27、28節

「イエスは、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のために、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。イエスは自分自身を献げ、ただ一度でそのことを成し遂げられたからです。」(27節)

27節は、大祭司イエスと世のほかの大祭司との根本的な違いを明らかにしています。まず、人間の大祭司は、自分と民の罪のために「毎日」いけにえを献げなければなりませんが、イエスはただ一度ご自分を献げることで、罪の完全な贖いを成し遂げられました。また世のほかの大祭司は動物のいけにえを献げることで自分と民の罪の贖いを行いましたが、イエスは自分自身を献げることで、完全な罪の贖いを成し遂げられました。しかも、ここで注目すべきことは、昨日も見ましたように、「敬虔で、悪も汚れもなく、罪人から離された」イエス様は、ご自分のための罪の贖いは一切必要ありませんでした、イエス様は、自分のためではなく、罪人である私たちのために、ご自身を献げてくださったのです。そして永遠に生きておられるイエス様が、全人類の罪の贖いを成し遂げるために、ただ一度ご自身を献げられることは、永遠に信じるすべての者に対する罪の贖いが有効であると言えます。まさにイエス様を通しての罪の贖いは、すべての人に必要不可欠であり、罪人にとっては最もふさわしいささげ物であったと言えます。28節は、今までの簡潔な要約と言えるかもしれません。「律法は、弱さを持つ人間たちを大祭司に立てますが」とは、律法に従ってレビ族の中から大祭司が立てられるということです。しかしイエス様は、律法の後から来た誓いのみことばによって大祭司とされましたが、それは「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしに祭司である」(5章6節、7章17節、詩篇110篇4節)を指しています。まさに、みことばを通して神のご計画と召しにより、「永遠に完全な者とされた御子」イエス様が大祭司として立てられたのです。

永遠に完全な者とされた御子イエス様が私たちに与えられたことは、父なる神様の恵みの約束によることであり、父なる神様の私たちすべてに対する愛から出たことです。